

『源氏物語』における常陸太守の官職と末摘花

蓑津, 碧
九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://hdl.handle.net/2324/7393735>

出版情報 : 語文研究. 138, pp.30-43, 2024-12-24. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



『源氏物語』における常陸太守の官職と末摘花

蓑 津 碧

一 はじめに

『源氏物語』に登場する末摘花の人物像は従来、醜貌や和歌の詠みぶり、古めかしさといった特徴から探られてきた。しかし、二世女王であること、特に常陸太守の娘であることに重きをおいた先行研究は決して多くない。光源氏は自身の庇護下にある女君に対し「人のほど」を意識した対応を心がけており、末摘花に関しては、

常陸の宮の御方は、人のほどあれば心苦しく思して、人の飾りばかりはいとよくもてなしきこえたまふ。

(初音卷、③一五三頁)

と、親王の娘であることから軽視せぬよう振る舞っていた。しかしこの描写からはあくまで二世女王に対する態度のみが見える。また、光源氏からの視点に限らず、常陸太守を補任された末摘花の父親王と、勾宮の異腹兄弟である四の皇子について、『源氏物語』ではともに官職についての詳しい言及はない。そのため他の親王群と異なり、常陸太守にあることで社会的にどのような認識をされていたのか、という点が不明瞭なままである。

他の官職の場合、例えば、故常陸宮同様に娘が光源氏と関わりのある桃園式部卿は、宿老の親王が担う式部卿の地位にあり、没したことを奏上された冷泉帝は「いよいよ世の中の騒がしきこと」(薄雲卷、②四五三頁)と思い嘆いている。また、娘の朝顔斎院に関しては、

「(前略) 中でも、やむごとなき御願ひ深くて、前齋院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ。」と申す。

(若菜上巻、④二八頁)

とあり、朱雀院に対し女三の宮の婿として光源氏を勧める女房が、「光源氏は身分の尊い女君を妻とすることを願っており、その証拠として朝顔齋院との繋がりが今でもあるのだ」と告げる描写から、父親王の地位も朝顔齋院の社会的な地位に影響を及ぼしている様子がうかがえる。

このように、父親王の造型と女君の人物像が繋がりをもちことが可能でありながら、末摘花と故常陸宮の繋がりを官職から見る先行研究はほとんど見受けられない。故常陸宮自身に焦点を当てた研究が多くないことも、その理由のひとつであろう。

まず、『源氏物語』の古注釈書としては、一条兼良の『花鳥余情』で常陸太守に関する言及が行われた。『花鳥余情』は「光孝天皇承和五年正月任常陸太守其後貞純親王代明親王元長親王等任し侍る也」常陸太守に補任されたことのある数名の親王の名を連ねただけであり、その准拠については詳らかにされていない。しかし、これを踏まえたうえで池田亀鑑「源

氏物語の構成とその技法」^(注1)は、夕顔巻巻末の「過ぎにしも今日別るるも二道に行く方知らぬ秋の暮かな」(夕顔巻、①一九五頁)が、代明親王の姪である齋宮女御の歌を本歌とすることから、代明親王が故常陸宮を造型するために想起されたのであらうと述べる。また、代明親王の弟であり、黒貂の毛皮に関する逸話や学問を好んだこと^(注2)で知られる重明親王の長子・源邦正の容貌が、末摘花に重なることを指摘する。

次いで栗山元子「末摘花巻における引用の諸相」^(注3)は、出家後の経済的不如意や、常陸太守へ二度の補任がされたという経緯から、故常陸宮のモデルとして、文徳天皇皇子である惟喬親王の存在を挙げる。

そして塚原明弘「常陸の宮の晩年の姫君」^(注5)では、極官である常陸太守の補任期間に、紫式部の祖父が常陸介をつとめた可能性があることから、昭平親王を故常陸宮の参照事項として挙げている。また、昭平親王には美しい娘がいるため、読者は昭平親王の想起によって美しい女王の登場を予想し、結果として末摘花が醜いことに対する衝撃が増すと述べる。

このほか、坂本共展「源氏と末摘花」^(注6)では、登場人物の年齢や朝顔齋院の前任者の退下といった出来事から、故常陸宮を桐壺帝の異腹兄弟であるとし、末摘花が二条東院に迎え入れられた理由を桐壺帝縁のものであるとする。

以上の先行研究に対する見解は後述するが、故常陸宮のモデルに関する先行研究は、いずれも主に一人の親王をモデル、もしくは参照事項として挙げている。その中で池田論文が、末摘花のモデルとして指摘した源邦正の父・重明親王について、黒貂の毛皮に関する逸話や、学問を得意としていたことに言及した点は看過すべきではない。ただし、池田論文は故常陸宮のモデルについて代明親王に対する指摘にとどまったために、末摘花と故常陸宮の人物造型における直接的な繋がりを提示するには至らなかった。

そこで、朝顔齋院が父親王の官職によって社会的地位に影響を及ぼされたように、官職が親子の人物造型に関わるものとして考察を行うことが必要になると想定される。従来行われてきた史実と作中人物が一对一となるモデルの特定を避けることで、末摘花と故常陸宮の人物造型における関わりが明らかになると仮定し、本稿では常陸太守という官職から故常陸宮、そして末摘花の人物造型について探っていく。

二 史実における常陸太守

常陸太守とは天長三（八二六）年、清原夏野の奏上をもつて、上野・上総の二国とともに親王任官職のポストを増やす

こと、および無品親王に対する経済待遇の保障を目的として設置された官職である。国守の得られる主な収入源である公廨稲の数を見ると、上野国・上総国の国守が得られる公廨稲がおよそ二万九千束であるのに対し、大国である常陸国はおよそ三万六千束とはるかに多い。本稿末尾に付した、桓武朝から後一条朝までの常陸太守の補任歴を整理した表を参照すると、常陸太守が二度続けて補任された例はないことは明らかである。これは、常陸太守の経済的安定が理由のひとつであると考えられる。ただし、経済的基盤が不安定な親王が補任されるとは限らず、主に四品親王が任じられ、約四年の任期をもって交替した。

次に補任の傾向に関し品位以外の要素として、常陸太守を補任された各親王とそれぞれの任期における天皇の血縁関係も確認したい。昌泰三（九〇〇）年までを対象として調査を行った安田政彦「親王任国」^{〔注〕}では、清和朝において賀陽親王以外が清和天皇と父を同じくすることに言及しており、昌泰三年以降について独自に調査を行ったところ、朱雀朝・円融朝にも同様の傾向が見られた。

さらに、常陸太守補任歴のある親王の極官や最終官職を見ていくと、極官を常陸太守とする親王に貞数親王・昭平親王、最終官職を常陸太守とする親王に人康親王・貞数親王・貞真

【表】

清和				文徳		仁明			淳和			天皇
八七二	八六八	八六四	八六〇	八五七	八五三	八四八	八四四	八四〇	八三八	八三四	八三〇	年代
(惟一) 惟恒親王	(一八) 惟彦親王	(二二) 惟喬親王	(六六) 賀陽親王	(二八) 人康親王	(六一) 仲野親王	(一八) 時康親王	(五八) 葛原親王	(四〇) 葛井親王	(一九) 忠良親王	(三四) 葛井親王	(四五) 葛原親王	(年齢) 常陸太守
四品	四品	四品	二品	四品	二品	四品	一品	四品	四品	四品	二品	品位
(八七五) 治部卿			彈正尹 治部卿	彈正尹	式部卿		式部卿				彈正尹 式部卿	兼任
母…藤原今子	父…文徳天皇 母…滋野奥子	父…文徳天皇 母…紀靜子 (更衣)	父…多治比真宗 (夫人)	父…桓武天皇 母…多治比真宗 (女御)	父…仁明天皇 母…藤原河子	父…仁明天皇 母…藤原沢子 (女御)			母…嵯峨天皇 父…百濟貴命 (女御)	父…桓武天皇 母…坂上春子	父…桓武天皇 母…多治比真宗 (夫人)	父母
極官…兵部卿	極官…兵部卿	極位…四品 極官…兵部卿	極位…二品 極官…中務卿	極位…二品 極官…大宰帥・彈正尹	極位…四品 極官…式部卿	のちの光孝天皇 (八五〇)	大宰帥再補任 (八五〇)		極位…二品 極官…式部卿	極位…三品 極官…兵部卿	極位…一品 極官…式部卿	備考

円融	朱雀		醍醐			宇多	光孝	陽成		天皇
九七七	九三六	九三〇	九二六	九二五	八九八	八八七	八八四	八八〇	八七六	年代
昭平親王 (二四)	有明親王 (二六)	代明親王 (三二)	貞真親王 (五〇)	代明親王 (二一)	貞数親王 (二三)	貞固親王 (?)	貞固親王 (?)	時康親王 (五〇)	惟彦親王 (二六)	常陸太守 (年齢)
四品	四品	四品		四品	四品	四品	四品	二品	四品	品位
		中務卿				彈正尹		式部卿	彈正尹 治部卿	兼任
父…村上天皇 母…藤原正妃 (更衣)	父…醍醐天皇 母…源和子 (女御)		父…清和天皇 母…藤原諸藤女	父…醍醐天皇 母…藤原鮮子女 (更衣)	父…清和天皇 母…在原文子 (更衣)		父…清和天皇 母…橘休藤女 (更衣)			父母
最終官職…常陸太守	極位…四品 極官…兵部卿		極位…三品 極官…中務卿	極位…三品 極官…中務卿	極位…四品 極官…常陸太守		極位…三品 極官…大宰帥・彈正尹	大宰帥再補任 (八八四)		備考

※村上朝・冷泉朝・花山朝の後一条朝では新たに補任される親王が見えないため省略した。

親王・昭平親王の名が確認される。『源氏物語』に登場する故常陸宮の補任歴は不明であるものの、少なくとも出家した様子はなく、さらに極官ないしは最終官職を常陸太守としたものと考えられる。史実に見える親王群も、故常陸宮と同様に出家の様子もなく、極官もしくは最終官職を常陸太守とする人物が複数名存在したことは明らかである。

また、大宰帥の補任傾向からも、常陸太守補任の傾向が見えてくる。安田政彦「親王任国太守と大宰帥の補任について」^(注9)が指摘した大宰帥補任の傾向は以下五点である。

- ① 収益が三国太守と大きく変わらない点
- ② 大宰帥が九国二島を統べる中央官的役割をもつ点
- ③ 九世紀に多く三品の親王が補任された点
- ④ 四品親王の大宰帥補任の理由として天皇の寵愛が考えられる点
- ⑤ 大宰帥に再補任された親王のほとんどが晩年である点

これによって同論文は大宰帥に優遇的な意味合いを認めている。特に、四品で大宰帥に補任された親王は仲野親王・惟喬親王・宗康親王・惟彦親王が、大宰帥に再補任された親王に葛原親王・賀陽親王・仲野親王・時康親王がそれぞれ該当

する。再補任された親王として、宗康親王以外は常陸太守の補任歴が見える^(注10)。また、葛原親王・時康親王は常陸太守再補任の経験をもち、ともに常陸太守に再補任された直後に大宰帥に再補任されている。よって、常陸太守に再補任されるということにも親王に対する優遇の意味をもつ可能性があると考えられる。

以上より常陸太守という官職の特徴を整理すると、

- ① 常陸太守は比較的裕福な経済基盤をもっていたこと
- ② 経済面・社会的地位として比較的優遇された官職であったこと
- ③ 特定の時代には天皇の兄弟が補任される傾向にあったこと

が挙げられる。また、極官や最終官職を常陸太守とする親王がそれぞれに見られたことは重要な点であり、故常陸宮のモデルとして複数名の親王の影響があると考えられよう。

では、常陸太守を補任した親王の特徴として官職以外にはどのような点が見られるのか。桓武朝〜後一条朝における常陸太守を補任された親王と『源氏物語』の故常陸宮の重なりを次節では探っていく。

三 故常陸宮と常陸太守を補任した親王

経済状況に関し、史実では比較的裕福な経済基盤があったことは先に述べた通りであるが、故常陸宮については以下のような描写がある。

・ といったう荒れわたりてさびしき所に、さばかりの人の、古めかしうところせくかしづきすゑたりけむなごりなく、いかに思ほし残すところなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどもありけれなど思ひつづけても、

（末摘花巻、①二六九頁）

・ 「あはれ、さも寒き年かな。寿ければ、かかる世にも逢ふものなりけり」とて、うち泣くもあり。「故宮おはしましし世を、などてからしと思ひけむ。かく頼みなくとも過ぐるものなりけり」とて

（末摘花巻、①二九〇頁）

このように、窮乏ぶりが何度も描写されるのが特徴的であ

ろう。しかし、故常陸宮存命時はそうではないと考えられる。女房たちが傍線部のように困窮にひどくあえぐことはなかった様子を述懐していた点や、

・ 聴色のわりなう上白みたる一かさね、なごりなう黒き桂さかねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、

（末摘花巻、①二九三頁）

・ 御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様にてうるはしきを、なま物のゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わざとそのかの人にせさせたまへるとたづね聞きて案内するも、

（蓬生巻、②三三八頁）

とあるように、高級品である黒貂の毛皮を所有していた点、邸の調度品を「わざとそのかの人にせさせたまへる」と人に命じて作らせた描写から、故常陸宮存命時の暮らしさえ苦しかったと思わせる女房たちの言葉はあれど、当時は比較的天豊かな日々を送っていたことが想定される。これらの様子から、常陸太守を補任されていた故常陸宮の経済基盤自体は

安定しており、生活の困窮は故常陸宮の死後始まったものと考えられよう。

調度品とは異なるものの、それに関するものとして、賀陽親王はものづくりを得意としていたことが『今昔物語集』『高陽親王造人形立田中語第二』の話から見えてくる。早魃の起きた年に、賀陽親王の製作したからくり人形によって耕作用の水を確保したこの話では、「此モ皇子ノ極タル物ノ上手、風流ノ至ル所也トゾ人讃ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ」『今昔物語集』、③二四九頁）と評されており、また、『栄花物語』では、法成寺の万法会で寄進された様々な灯台について人々が論評する中、「むかし賀陽親王といひし人こそ細工はいみじかりけれ。それもがな」『栄花物語』巻十九、②三四三頁）と言う者があつたとも記されている。このように、細工に関する興味関心が故常陸宮と賀陽親王には共通して見られるのだ。

また、調度品に気を遣っていた故常陸宮邸は、邸自体も趣向を凝らされた物であつたと考えられる。

塵は積もれど、紛るることなきうるはしき御住まひにて
明かし暮らしたまふ。

（蓬生卷、②三三〇頁）

荒廃しているとはいえ、故常陸宮邸は依然として美しさをも見せている。史実を見れば人康親王が、「その山科の宮に、滝落し、水走らせなどして、おもしろく造られたるに」（『伊勢物語』一八〇頁）と山科の地に壮麗な邸を建てていたことと重なる。

次に、故常陸宮が得意としていたものに着目したい。

「（前略）琴をぞなつかしき語らひ人と思へる」と聞こゆれば、「三つの友にて、いま一くさやうたてあらむ」とて、「我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづきてものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあらじと思ふ」と語らひたまふ。

（末摘花卷、①二六七頁）

大輔命婦から末摘花について初めて話を聞いた光源氏は、故常陸宮が琴の名手であつたと評価する。しかし、当該場面からは琴のみならず、故常陸宮が「三つの友」すべてに親しんでいたと考える事も可能なため、詩・琴・酒に関する評価について見ていきたい。

まず、詩については和歌として故常陸宮が得意であつたとされる。

常陸の親王の書きおきたまへりける紙屋紙の草子をこそ、

(延長四年二月条)

見よとておこせたりしか、和歌の髓脳いところせう、
病避るべきところ多かりしかば、

(玉鬘卷、③一三八頁)

末摘花が光源氏に見せた歌論書は故常陸宮が書き残したものであり、親王が和歌に精通していたことがうかがえる。実在した常陸太守補任歴のある親王では、惟喬親王・貞教親王の和歌がそれぞれ勅撰集に入集している。よって両名の和歌に対する造詣が深かったことは明白であり、故常陸宮と各親王の重なりが見えよう。

次いで、楽器については琴を故常陸宮は得意としていたが、常陸太守を補任した親王は箏を得意とした人物が複数人確認される。『醍醐天皇御記』には貞真親王が延喜四年清凉殿における花宴にて、

其後管絃頻奏、吟詠不止、仰常陸太守親王彈箏、中納言藤原朝臣彈琵琶、朕彈和琴、

(其の後管弦を頻りに奏で、吟詠止まず、常陸太守親王箏を弾かむと仰し、中納言藤原朝臣琵琶を弾き、朕は和琴を弾き、)

と箏を演奏した話が見られる。また、貞真親王は、惟喬親王とともに箏道の師匠と弟子の系図である『秦箏相承血脉』(成立年未詳)に名を連ねていることから箏を非常に得意としていたことがうかがえる。

そして、酒については葛井親王が晩年酒を好んだ様子が見える。葛井親王は酒以外にも声楽や管弦を好んだらしく、

親王耽愛声楽。殊翫絲管。晩年好酒。志在燕樂。累日連夜。淵醉忘疲

(親王は声楽を愛し耽る。殊に絲管を翫ぶ。晩年酒を好む。志燕樂に在り。累日連夜。淵醉し疲れを忘れる。)

(『文徳実録』卷一、嘉祥三年四月二日条)

という記録も残っており、特に故常陸宮との重なりが見えてくる。

このように、故常陸宮の生活や親しんだものについて史実の親王との重なりが多く見られ、特に常陸太守を補任された親王は文化的な面をもっていたのである。

四 禪師の君と常陸太守を補任した親王

さて、故常陸宮は出家した様子がない人物として描かれるも、死の間際に出家したと考ええると違和感はない。対して末摘花の周辺人物として兄である禪師の君は早くに出家した人物として登場する。史実の親王の中で禪師の親王と呼ばれた人物には人康親王と惟喬親王がおり、特に人康親王は『伊勢物語』に「山科の禪師の親王」として登場する。この山科は醍醐寺が建つ土地でもあることから、禪師の君が後に醍醐の阿闍梨として再登場したのは、人康親王のイメージを喚起させる意図もあったのではないかと考えられる。

次いで二名の親王と禪師の君との重なりについて経済状況などから検討したい。

・はかなきことにてもとぶらひきこゆる人はなき御身なり。
ただ御兄弟の禪師の君ばかりぞ、まれにも京に出でたまふ時はさしのぞきたまへど、それも世になき古めき人にて、同じき法師といふ中にも、たづきなくこの世を離れる聖にものしたまひて、しげき草蓬生をだにかき払はむものとも思ひよしたまはず。
(蓬生巻、②三一九頁)

・「醍醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべるとて、衣どももえ縫ひはべらでなん。皮衣をさへとられにし後寒くはべる」と聞こえたまふは、いと鼻赤き御兄弟なり。

(初音巻、③一五四頁)

右の二例から見えるように、末摘花の兄である禪師の君は人付き合いが少なく、かつ経済的に苦しんでいた。同様に経済的不如意に陥っていたのは惟喬親王である。外戚による援助を望めなかった惟喬親王は、『日本三代実録』に「无品惟喬親王益封百戸（无品惟喬親王益百戸を封ず）」（貞観十六年九月廿一日条）として、惟喬親王が出家した二年後に封百戸が与えられた旨が記されている。これは、初音巻において末摘花がなければしの衣類を手渡さざるを得なかったほど、兄の禪師の君が苦しい生活を送っていた様子とも重なるだろう。

以上、禪師・醍醐の阿闍梨といった呼称や経済状況は、わずかな違いを残しつつも、故常陸宮の子である禪師の君にも常陸太守を補任した親王のイメージを引いて造型されたことを示す、重要な手がかりとして認められよう。

五 『源氏物語』における故常陸宮

冒頭で述べたように、故常陸宮のモデルとして、先行研究では惟喬親王・昭平親王・代明親王の三名が指摘された。しかし、いずれの親王も故常陸宮、もしくは禪師の君のモデルとしてはいささか不審な点が残る。

まず惟喬親王の困窮は出家後の話であることから、故常陸宮の貧困とは異質のものである。加えて、惟喬親王以外にも二度常陸太守へ補任された親王は複数名いるため、常陸太守の補任の回数は故常陸宮の准拠を個人に求める要素たり得ないと考えられる。また、昭平親王については、経歴などとの矛盾は特に見られないものの、『源氏物語』作中における故常陸宮自身の特徴がさほど反映されていない点を考慮すべきである。なお、皇籍復帰という昭平親王の特徴は重要であり、故常陸宮が昭平親王の影響を受けたならば、皇籍復帰に関する一文が作中に見えても違和感はない。実際、光源氏の処遇に関し冷泉帝は、

一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、さらに親王にもなり、位にも即きたまひつるも、あまたの例ありけ

り。

(薄雲卷、②四五五頁)

と皇籍復帰に関する先例に言及している。そして代明親王については、先述したように、あくまで『花鳥余情』に名前が載る程度であり、故常陸宮との重なりはほとんど見られない。従来のような一対一のモデルを特定するような研究では親王官職のもつ役割が不明瞭なままに終わり、作中人物の人物造型を十分に理解するには及ばない。よって、官職自体の持つ特徴や、複数の実在した該当する官職を補任した親王の様々な側面を取り入れることが必要とされよう。

六 末摘花へ投影される常陸太守

最後に、末摘花自身に常陸太守という父の官職がどのような影響を及ぼしたのか確認をしていく。住環境、経済状況についてはいずれも故常陸宮存命時代に劣るのは先述した通りである。また、故常陸宮が好んだ三つの友に関しては、酒以外についての描写が見られる。

・ほのかに掻き鳴らしたまふ、をかしう聞こゆ。なにばか

り深き手ならねど、物の音がらの筋ことなるものなれば、
聞きにくくも思されず。

(末摘花卷、①二六九頁)

・月やうやう出でて、荒れたる籬のほどうとましく、うち
ながめたまふに、琴そそのかされてほのかに掻きならし
たまふほど、けしうはあらず。すこしけ近く、いまめき
たるけをつけばやとぞ、乱れたる心には心もとなく思ひ
ゐたる。

(末摘花卷、①二八〇頁)

まず、琴に関する二つの評価には、「をかしう聞こゆ」「け
しうはあらず」と一見高評価を得るものの、どちらも「物の
音がら筋ことなるものなれば」「心もとなく思ひゐたる」と光
源氏が不満に思う様子も同時に描写されている。また、和歌
に関しても、

さても、あさましの口つきや、これこそは手づからの御
事の限りなめれ、侍従こそとり直すべかめれ、

(末摘花卷、①二九九頁)

と、人からの手直しが必要だと思わせる程度である。のちに
も、

「古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るるがごとこそ離れねな。
まろもその列ぞかし。さらに一筋にまつはれて、いまめ
きたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ妬きことははたあれ。」

(玉鬘卷、③一三八頁)

「古代の歌詠み」と言われるように、末摘花が当世風の和歌は
詠めない点に光源氏は不満をこぼす。しかし、末摘花自身は
琴・和歌ともに自信があつたらしく、

「聞き知る人こそあなれ。もししきに行きかふ人の聞くば
かりやは」とて召し寄するも

(末摘花卷、①二六四頁)

と、大輔命婦に琴の音を求められ、さほど迷う様子もなく琴
を奏でたほか、

・姫君も、おぼろけならでし出でたまへるわざなれ
ば、物に書きつけておきたまへりけり。

（末摘花巻、①三〇二頁）

・「（前略）常陸の親王の書きおきたまへりける紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか、」

（玉鬘巻、③一三八頁）

と、光源氏からは不評であつた歌であつても努力して詠んだ物として書き残しており、またその後には父親王から受け継いだ歌論書を光源氏へと勧めている。このように、少なくとも末摘花は琴・和歌ともによくしているという自認があつたのである。

次いで、調度品に関連し末摘花が他者へ贈り物をする際に用いた箱について見ていきたい。

・わが御髪の落ちたりけるを取り集めて鬘にしたまへるが、九尺余ばかりにていときよらなるを、をかしげなる箱に入れて、

（蓬生巻、②三四一頁）

・青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とかや、昔の人のめでたうしける袷の袴一具、紫のしらきり見ゆる叢地の御小

袷と、よき衣箱に入れて、つつみいとうるはしうて奉れたまへり。

（行幸巻、③三一四頁）

末摘花が贈る品は、「をかしげなる」「よき」などすぐれた箱に入っている。これは、細工に興味関心をもつていた実在の常陸太守、ひいては故常陸宮の特徴を引き継いだ描写とも言えよう。ただし中身に関しては困窮に喘いでいたこともあり、自身の抜け毛を集めた鬘や、色あせた小袷など好ましいものではない。

以上の琴・和歌や箱などから見えるように、末摘花は故常陸宮より受け継いだものが末摘花自身の特徴として数えられる。では、それが意味するところは一体何か。

端的に言えば、直接的な常陸太守像の投影である。末摘花を故常陸宮と重ねることでの可能になる表現であり、故常陸宮と末摘花の僅かな差異というのはあくまで常陸太守のもつ要素を受け継いだという点において、単なる希釈に過ぎないのだ。邸や調度品は父親王の残した物を使い続けているため当然のこと、例えば琴については、父親王から教わった楽器を男君に聞かせるという点で明石の御方や宇治の姫君たちとの違いが現れている。

他に黒貂の毛皮が挙げられる。従来指摘されたように重明

親王——源邦正の関わりを考慮すべきであるものの、経済的基盤の整った官職である常陸太守から受け継いだ品物として捉えるならば、黒貂の毛皮とは単に故常陸宮が充分な俸料を得ていたことを強調するために用いられたものであると判断できよう。即ち、常陸太守の富貴性を示すために用いられた黒貂の毛皮を所有していたのが重明親王であり、その親子関係ゆえに源邦正の容貌が末摘花に与えられたと考えられるのである。

おわりに

『源氏物語』に登場する故常陸宮は、常陸太守の官職がもつ経済的基盤の安定、そして史実の親王が持つ文化的な側面を取り入れたものとして造型された。また、故常陸宮同様、禪師の君や末摘花は史実の常陸太守の特徴を直接的に与えられたのである。

このことは、従来のごとき一対一の史実と作中の登場人物の比定では、登場人物の造型について探るに不足し、准拠の研究に対する可能性を狭めていることを示唆している。特に一般臣下の女に比べ婚姻も容易でない二世女王については、記録も少なく、系譜にこだわらない准拠研究が必要とされよ

う。既に式部卿が宿老の親王が補任する官職であるため、その娘である朝顔斎院が世間から重んじられたということは指摘されてきたが、末摘花もまた、文化人の補任された常陸太守という官職の娘として琴や歌を嗜む女君として登場し、他者から評価をされる人物として描写されたのである。

※本文の引用は『源氏物語』『今昔物語集』『栄花物語』『伊勢物語』——『新編日本古典文学全集』（小学館）、『花鳥余情』——『源氏物語古注集成』（おうふう）、『醍醐天皇御記』——『続々群書類従』（続群書類従完成会）、『類聚三代格』『日本三代実録』『文徳実録』——『新訂増補 国史大系』（吉川弘文館）、『江家次第』——『神道体系』による。

注1 池田亀鑑「源氏物語の構成とその技法」〔『望郷』八、一九四九年六月〕

注2 「昔蕃客参入時、重明親王乗鴨毛車」、著「黒貂裘八重」見物、此間蕃客纔以「件裘一領」持来為「重物」、見「八重」大慙云々、〔『江家次第』巻第五「上申日春日祭事」二七二頁〕。重明親王は黒貂の毛皮を八枚重ねて渡来した客人の前に現れている。黒貂の毛皮は相当な高級品であったため、一枚しか持っていないかった蕃客は恥じ入ったという。

注 3

『今昔物語集』「左京大夫□付異名語第二十一」に「長少シ細高ニテ、極クアテヤカナル様ハシタレドモ、有様奈ナム嗚呼也ケル。頭ノ鍔頭也ケレバ、頭ハ背ニ不付ズシテ、眼皮ハ黒クテ、鼻鮮ニ高クテ、色少シ赤カリケリ。唇ハ薄ク色モ無クテ、咲バ齒ガチナル者ノ斷ハ赤ナム見エケル。音ハ鼻音ニテ高カリケリ。物云ヘバ一内響テゾ聞エケル。歩ビバ背ヲ振り尻振テゾ歩ビケル。其ノ人、殿上人ニテ有ケルニ、責テ色ノ青カリケレバ、□□ノ殿上人、皆此レヲ、青経ノ君トゾ付ケルヲ咲ヒケル。」(④二一〇(二二一頁)とある。末摘花の容貌は、「まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはとは見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかうたてあり。色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこようなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。瘦せたまへること、いとほしげにさらばひて、肩のほどなど、痛げなるまで衣のう上まで見ゆ。」(末摘花巻、①一九二(二九三頁)であるため、背や鼻の高さ、額の出てゐること、色の青白さなどが共通している。

注 4
栗山元子「末摘花巻における引用の諸相」(『国文学研究』一二五、一九九八年六月)

注 5
塚原明弘「常陸の宮の晩年の姫君」(『國學院雑誌』一二二(二二)、二〇二二年二月)

注 6
坂本共展「源氏と末摘花」(『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三年)

注 7
『類聚三代格』卷五、天長三年九月六日太政官符
応親王任「国守」事

上総国 常陸国 上野国

右檢中納言從三位兼行左兵衛督清原真人夏野奏上備。設置八省職寮相隸。百官守職庶務俱成。一事有闕万事皆緩。今親王任八省卿。此人地望素高。不_レ得_レ就_レ職。無_レ知_レ碎務。仍官事自解政迹日蕪。非_レ是庸愚之所_レ致。因_レ地勢使_レ之然也。凡官人遷代必署_レ名解由。至_レ有_レ欠物不_レ免_レ償物。居_レ此之費見其如此。望請。点_レ定_レ数國為親王國。迭_レ任_レ彼國身留_レ京都。意欲_レ居_レ京官者一兩人將_レ聽。若有_レ守闕者不_レ補_レ他人。其料物者納_レ置別倉支_レ無_レ品親王之要。伏聽_レ天裁者。正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣。奉_レ勅依_レ奏。但件等_レ国守官位卑下。宣_レ改_レ定_レ正四位下官。以為_レ勅任。号称_レ中_レ太_レ守_レ上。限_レ以_レ一代。不_レ可_レ永_レ例。

注 8
安田政彦「親王任国」(『平安時代皇親の研究』吉川弘文館、一九九八年。初出「親王任国制の展開——太守補任をめぐって」『古代文化』三七(二)、一九八五年五月)

注 9
安田政彦「親王任国太守と大宰帥の補任について」(『平安時代皇親の研究』吉川弘文館、一九九八年)

注 10
宗康親王は承和一一(八四四)年の元服を執り行つた翌年に大宰帥に補任され、途中中務卿を兼ねるも、嘉祥三(八五〇)年父・仁明天皇の入道とともに出家した。親王官職の中でも優遇された可能性のある大宰帥の補任期間が約五年であったことをふまえると、宗康親王が常陸太守を補任されなかったことに違和感はない。

(みのつ みどり・本学大学院博士後期課程)